

特別支援教育推進通信

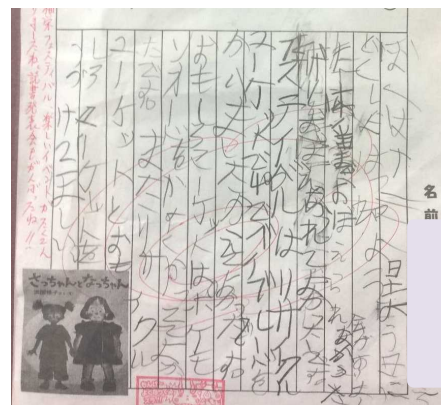
葛南教育事務所 特別支援教育班

「文字を書く」

ということは誰にでも簡単にできることだと思込んでいませんか。日本人で日本語が話せるのだから、1年生でひらがなを習ったら、当たり前に見えるようになる、努力と練習で書けるようになる、と思いませんか。

実は、かなりの人が「文字を書く」ということについて苦手感を持っています。

- 例えば、
- ・文字をバランスよく書くことが苦手
 - ・読みにくい字(何が書いてあるか読めない)を書く
 - ・罫線やマス目からはみ出してしまう
 - ・鏡文字を書く
 - ・板書の写し書きが遅い、できない。
 - ・「っ」「ょ」等の特殊表記を間違う
 - ・独特の筆順で書いてしまう
 - ・文字をすぐに書けない(覚えるのが苦手)
 - ・偏(へん)と旁(つくり)がバラバラ
 - ・吹き出しの言葉や、感想をすぐに書けない 等です。



日本の教育システムは文字を書くことがとても重視されています。学年が上がるにつれて、『文字を書く』という学習形態がより多くとられるようになります。文字を書くことが苦手な子どもは、『書く』ということ自体がストレスになり、学習意欲がだんだんと低くなってしまいうこともあるので、子どもの様子に合わせた手だてをとることが大切です。

教室に掲示されている「自己紹介カード」や「〇学期の目標」に、漢字を覚えることが苦手な子どもは「漢字を書けるようになりたい!」、文字が乱雑で書くことが苦手な子どもは「字をきれいに書きたい!」、と書いています。

私たちは、この子どもたちの思いを受け止め、実現できるように、

今持っている力を最大限発揮できる環境設定や準備をして、

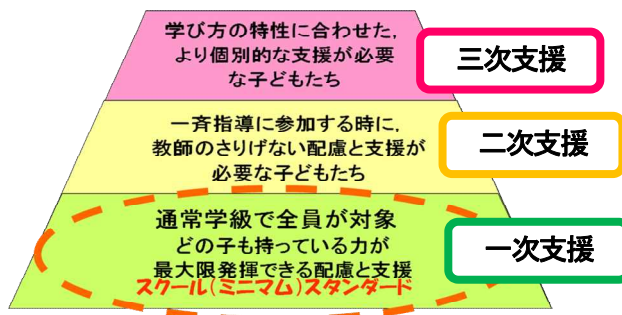
どうしたらきれいに書けるようになるかの方策を子どもたちに伝えていく

必要があります。

すべての子どもたちの「できた」「わかった」のために!

ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、誰もが、安心して過ごせる学校環境づくりと、わかりやすい授業づくりを推進しましょう。

「一次支援」と「二次支援」の土台部分をしっかり固めると、個や特性に応じた「三次支援」も効果が上がります。まず、どの子にとっても役に立つ支援を学校全体で取り組みましょう。



書字が どうして苦手なの？

○物の形をとらえたり、構成したりする力が弱いと文字を構成している線や点の形態がよくわからない。

○形を記憶したり、思い出したり、全体の中の一部をとらえたりする力が弱いと、書き写しが苦手。

○目と手を同時に使いながらの動作が苦手だと「見て書く」ことが難しい。

○文字を書くことへの苦手意識がある。何をどこにどのように書けばよいかわからない。書けるのかなあ？という不安になり、書くことを嫌がってしまう。

○思ったとおりに手が動かない。指先に力が入らない。

○何をどう書くか、文を構成する方法が分かっていないと、文章を書くことができない。

一次支援

文字を書く基本環境を整える

苦手な部分があっても、それを補うように環境を整えることが大切です。

ノート的位置を10cm～15cm左右に動かすだけで字がきれいになる、鉛筆の長さを変えただけで書きやすくなる子どもがたくさんいます。ノートを罫線から5mm方眼に変えただけで、書くスピードが上がる子どもがいます。子どもたちの力を最大限引き出し「書けた」「きれいに書けた」という達成感をもたせていきましょう。

姿勢

道具

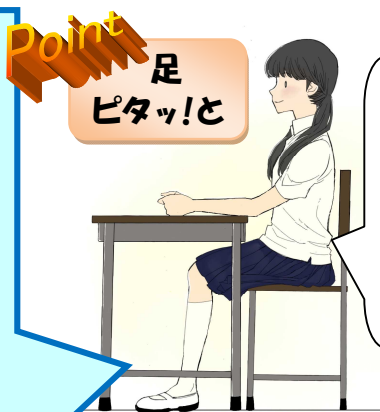
持っている能力を

十分に発揮できる

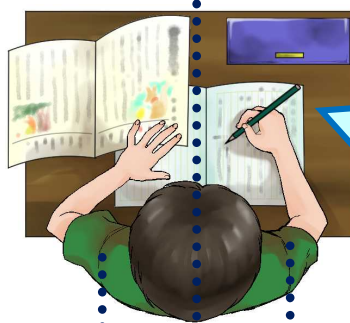
ノート・プリント・板書

支援① 姿勢と字を書いている手の位置を確認

足が床についていないと、自分の持っている力が上手に道具へ伝わらず、鉛筆やハサミを上手く操作できない原因になります。



背筋の起こし方は、通信2を参考に！



この範囲の中で文字を書いているか確認しよう！

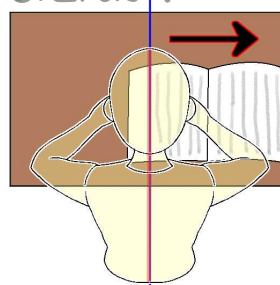
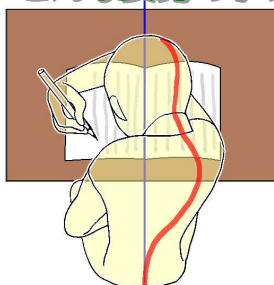
人が道具を操作する時に、一番力が発揮できるのは左右肩幅から正中線の間です。利き手から正中線を越えて遠くになればなるほど、上手に操作することが難しくなります。

正中線を越えて文字を書こうとすると、鉛筆を正しく持っているときよりも書きにくいので、手首を曲げようとしてしまいます。

また、手元の文字を確認しようとして姿勢も自然と崩れていってしまいます。

書くスピードも落ち、きれいに書けません。疲れやすいです。

教室にこんな姿勢の子いませんか？



Point ノートを右にずらしてあげましょう！

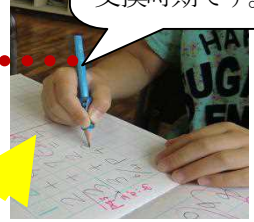
支援② 書きやすい、使いやすい道具で！

ここより短くなったら交換時期です。

ボールペンやシャープペンシルの長さを知っていますか？。ほとんどが14cmで設計されています。それは、より多くの人が持ちやすく、書きやすいとされている長さだからです。（小学校低学年はもう少し短い方が良いでしょう。）

小学校1年生には「鉛筆の正しい持ち方」を指導しています。書くときに無駄な力がかからず、書きやすい持ち方のできる鉛筆の長さの物を使用していますか。せっかく指導した持ち方も、短すぎる鉛筆を使っていると、間違った持ち方になってしまいます。

子どもたちが物を大切にすることを育むことも必要ですが、学習がスムーズに進むためには、使う道具を優先させることも必要です。



Point 書きやすい筆記用具

- ◎ 鉛筆は2B以上のもの。（筆圧が弱い子は、4Bや6Bの濃いもの、太芯がよい）
- ◎ 線が細くなり過ぎないように削りすぎない。
（濃い鉛筆は芯が柔らかく先が丸くなるのが早いので、太くなったら交換）
- ◎ 鉛筆の頭が、人差し指に沿わせて支えている**第3関節よりも短くなったら**交換。
- ◎ 芯の太さが均一になる0.9mm以上の芯の太いシャープペンシルが使いやすい場合も。
- ◎ 鉛筆よりもサインペンの方が、線が太く見えやすい場合も。（3次支援）



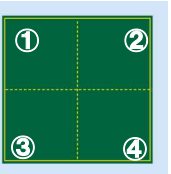
指先の力が不十分の時は、握りやすい△鉛筆や、グリッパで太さをつけるとよい。

支援③ 「書ける」ためのノートとプリント

修学旅行や遠足の後で、真っ白な紙を渡されて、「新聞を作りましょう」と指示が出されたり、道徳の時間の最後に、「今日の話し合いで感じたこと、思ったことを書きましょう」という、まとめの時間が設定されたりします。文字を書くことが苦手な子どもは、感想や、頭の中に浮かんだこと、思ったことを書きたくても、このスペースを横に使うのか？ 縦書きにするのか？ どのぐらいの文字の大きさなら書ききれぬのか？ということに迷っていたり、つまづいていたりすることがあります。書き始めたけれども文字のバランスが悪くて、曲がったり、書ききれなくなったりして、消しゴムで消そうとして紙がグチャグチャになってしまうこともあります。

右の写真は小学校1年生、同じ子どもの観察記録用紙です。①と②、二つの文字を比べてみて下さい。明らかに文字のバランスが違うのが分かります。日本語は曲線や交差することが多いので、上手くバランスを取りながら文字を書くことはとても難しいことです。

ひらがなを最初に指導する時は、文字指導版を使って『1の部屋』『2の部屋』と説明しながら、文字を書き始める場所や止める位置、はらう所をきちんと教えています。文字バランスをとるのが苦手な子どもは、書く場所をしっかりと確認できる十字リーダーのあるプリントやノートの方が整った文字が書けます。マスがあることで、どの位の量を書けるのかがわかることにもなります。書くスピードもかわってきます。

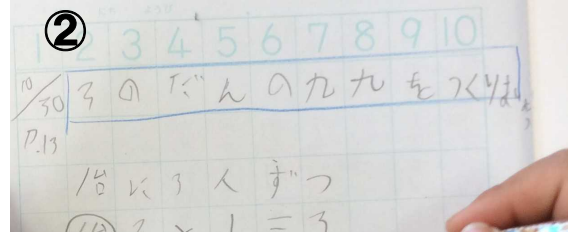
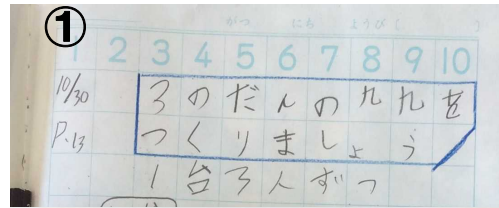
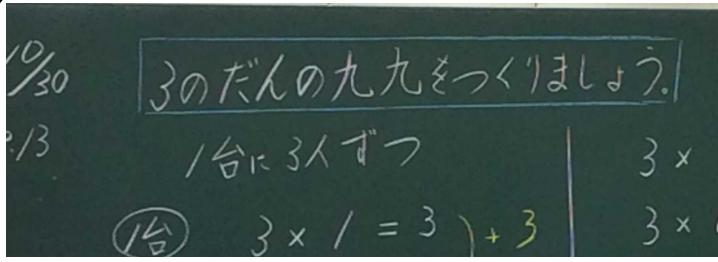


Point 白紙より罫線

罫線よりマス目 マス目より十字リーダー

楽に丁寧に書けるプリントを準備してあげたいですね！

支援④ ノートやプリントに写しやすい 板書



2年生の算数の時間の板書とノートです。

32人の子どもたちの中で①のように書けた子どもは6人。残りの26人の子どもは、先生が横1行で学習問題を書いたので、②のように一生懸命に1行で書き写しました。

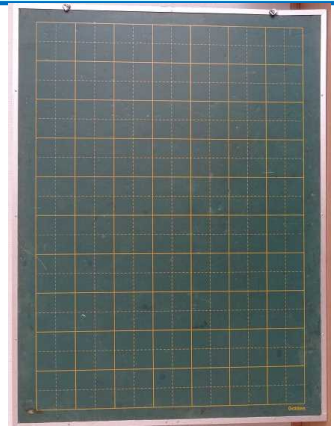
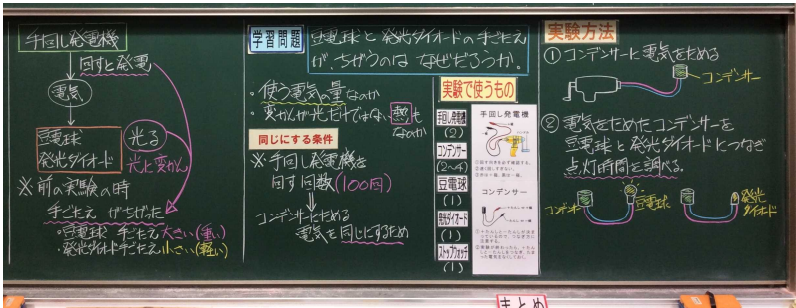
先生は、日付やページ、学習問題を青で囲んでくれていた(とても良い支援です!)のですが、残念なことに、問題文をノートに上手く書き写せなかった子どもたちが多くいました。

写そうとしている折り返しの文字と、自分が書いているノートの折り返す文字が違っていると、どこを書いているか分からなくなって、混乱してしまう子どもが多いということが分かります。

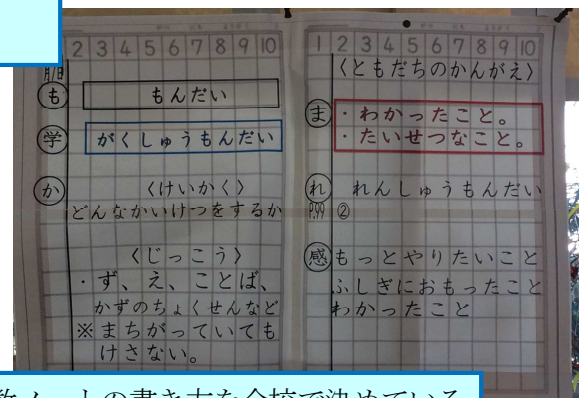
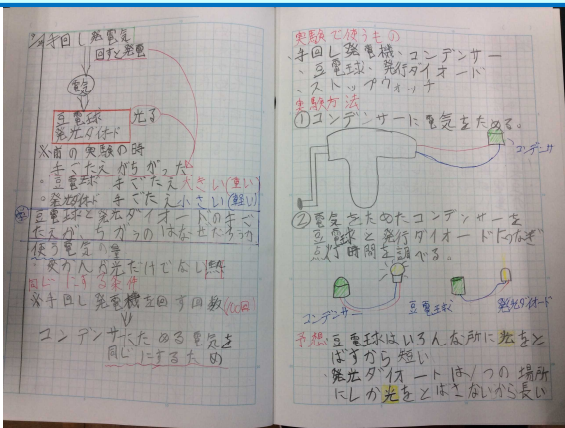
Point 子どもたちが使っている ノートのマス目の数に合わせて、 板書の文字を折り返す

特に低学年は気を付けてあげたいところです。

1年生等はマス目黒板を使うと、さらに書き写しやすくなります。



6年生の理科の板書とノートです。文字を書くことが苦手といわれている子どもも、しっかりと板書を写して書けています。先生の板書がノートと連動していることがよくわかります。



算数ノートの書き方を全校で決めている学校もあります。いつも決まった形(流れ)や記号(マーク)があると書きやすいです。